



Title	『紅樓夢』研究における脂評の位置づけ：甲戌本と庚辰本にみえる脂評を中心に
Author(s)	王, 竹
Citation	中国研究集刊. 2013, 57, p. 61-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/58687">https://doi.org/10.18910/58687</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『紅樓夢』研究における脂評の位置づけ

—甲戌本と庚辰本にみえる脂評を中心に—

王 竹

### はじめに

周知のように、『紅樓夢』研究は、版本の比較研究によつて原文の文字や文体を回復する版本学、脂硯齋の評論を中心に研究する脂学、失われた八十一回以降を探究し原著の精神を明確にする探逸学、曹雪芹および曹氏一族を研究し曹雪芹の思想がどのように育まれたかを明らかにする曹学の四ジャンルに分類される。ただ、これまでは、版本やその続作、あるいは小説の成立過程や作者の生涯などをめぐる研究が主流であった。

すでに拙稿『『紅樓夢』の思想的研究序論』<sup>〔注1〕</sup>でも述べたように、『紅樓夢』研究にとつて最も大きな手がが

りとなるのは、脂学——脂硯齋という人物を知り、残された多くの脂評を深く研究することである<sup>〔注2〕</sup>。ところが、『紅樓夢』研究ではもっぱら版本や曹家の考証がもてはやされ、脂評本をめぐつて創作過程や小説の題材、時代背景などを研究することが盛んで、脂評を用いて小説全体の思想を明らかにしようとする、換言すれば脂評を深く理解することによつて『紅樓夢』の思想的研究がなされることはほとんどなかったのが現実である。それは脂評の位置づけが正しくなされていなかったことによると考えられる。

いみじくも鄧遂夫が「脂批によつて小説の独特の表現手法と潜在的な思想を説明するのは、脂評本研究の中で最も重要なことである」<sup>〔注3〕</sup>というように、脂評の内容

を詳細に検討することこそが『紅樓夢』の思想研究にとって極めて重要である。そこで、本稿では甲戌本と庚辰本<sup>(注4)</sup>にみられる脂評を取りあげ、それぞれの意味を検証しながら、『紅樓夢』研究における脂評の位置づけを明確にする。

## 一、甲戌本にみえる脂評二条

一九二七年、新紅学<sup>(注5)</sup>の創始者胡適は『脂硯齋重評石頭記』の転写本を入手した<sup>(注6)</sup>。この写本は第一回～第八回、第十三回～第十六回、第二十五回～第二十八回の十六回分しか残存しないものであったが、第一回には他の早期抄本には見られない脂評「至脂硯齋甲戌抄閱再評、仍用石頭記（甲戌の年に脂硯齋が書き写して再び評論を加えた時もお、書名に「石頭記」を用いている）」があった。ここに記された「甲戌」（一七五四年）に因んで、後世これを「甲戌本」という。

一九六一年、その影印本が『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』と題して台湾商務印書館から出版されるにあたって、胡適は「影印《乾隆甲戌脂硯齋重評石頭記》の縁起」と題する一文を寄せ、甲戌本について以下のように概括している。

……私は甲戌本を『紅樓夢』最古の写本だと指摘してきた。それは本文の前に四百字の「凡例」があること、脂硯齋自ら題した七言律詩があること、その詩の最後の一句に「字字を看るに血なり、十年辛苦尋常ならざらん」。これらは通行の鈔本、刻本にはないものだからである。この写本には、すべての回に朱筆の眉評、夾評、小さな字で書き付けられた評語があり、それらの中には曹雪芹の家の事、卒年に關すること、『紅樓夢』最初原本の状態などを知ることできる重要な資料がある。例えば、第十三回【脂評】にみえる第十三回の作者による原題は「秦可卿淫喪天香樓」であったが、【曹雪芹】がこの回を完成した後、「（秦可卿を）赦してあげる」という【脂硯齋】の提言があり、ようやく「天香樓の秘事を削除し、原文より四、五ページが少なくなった」。また、脂評には、散逸した後半の内容、あるいは曹雪芹が予定していたと考えられる構想などを考証するのに役に立つ資料も少なくない。例えば、第二十八回の脂評「後の回には琪官と襲人は共に最後まで宝玉に仕える」、第二十七回の脂評「その後、紅玉は宝玉にとつて大いに力となる」などからみると、高鶚の四十回続作は全く曹雪芹の残稿を基づくものではなかった。

今日まで甲戌本より古い鈔本は発見されておらず、また、甲戌本の脂評の量より多い鈔本も存在しない。甲戌本は十六回残存するのみではあるが、その脂評は他のすべての鈔本より多い。

今日に至るまで、この甲戌本が最も古く、かつ最も価値が高い『紅樓夢』の写本である。

……我指出这个甲戌本子是世间最古的《红楼梦》写本，前面有“凡例”四百字，有自题七言律诗，结句云：“字字看来皆是血，十年辛苦不寻常”，都是流行的鈔本刻本所没有的。此本每回有朱笔眉评，夹评，小字密书，其中有极重要的资料，可以考知曹雪芹的家事和他死的年月日，可以考知《红楼梦》最初稿本的状态，如第十三回作者原题“秦可卿淫丧天香楼”，后来“姑赦之”才“删去天香楼事，少却四五页”。评语里还有不少资料，可以考知《红楼梦》后半部预定的结构，如云，“琪官后回与袭人供奉玉兄宝卿，得同始终”（二十八回评），如云“红玉（小红）后有宝玉大得力处”（二十七回评），此皆可见高鹗续作后四十回，并没有雪芹残稿作根据。

直到今天为止，还没有出现一部鈔本比甲戌本更古的，也还没有一部鈔本上面的评语有甲戌本那么多的。甲戌本虽止有十六回，而朱笔细评比其他任何本

子多得多。

所以到今天为止，这个甲戌本还是世间最古又最可宝贵的《红楼梦》写本<sup>注七</sup>。

胡適のいうように、甲戌本の発見によって、そこにみえる脂評から以下のことが明らかとなった。

一 原本に最も近い版本は甲戌本である。

二 『紅樓夢』の成書には少なくとも十年の歳月を費やした。

三 散逸した八十一回以降の内容と構想のてかり。

四 通行していた高鶚の四十回続作は曹雪芹とは無縁である。

五 それぞれの回の脂評が他の鈔本より多い。

甲戌本が発見されるまで、『紅樓夢』の版本は程高本<sup>注八</sup>が通行していた。その序に、『紅樓夢』の原本は『石頭記』であり、作者を特定することも、どのような人によって書かれたものかもわからない。ただそこに曹雪芹氏が数回にわたって削除修正したと書かれているだけである<sup>注九</sup>とあったため、もともと『石頭記』と題されていた『紅樓夢』は曹雪芹によって手を加えられたことはあっても、曹雪芹の作品であるかどうか断定しがたいと考えられていた。

ところが、胡適は甲戌本第一回に上述の通説を覆すに足る内容の脂評二条を発見したのである。一つは「壬午除夕、書未成、芹為淚尽而逝（壬午（一七六三年）の大晦日、本書はまだ完成できず、そのため（曹雪芹）は涙がつきて逝った）」の一文、もう一つは、冒頭にあげた「至脂硯齋甲戌抄閱再評、仍用石頭記」の一文である。胡適はこれらの二文から以下のことを結論した。

一 作者は曹雪芹であること。  
二 通行している百二十回本は曹雪芹の作品ではな  
こと。

三 曹雪芹の卒年は壬午の年、すなわち乾隆二十七年（一七六三年）の除夕（二月二日）であったこと。<sup>注10。</sup>

四 脂硯齋は実在の人物であったこと。  
五 『紅樓夢』は曹雪芹と脂硯齋との共同作業によつて生まれたものであること。<sup>注11。</sup>

「至脂硯齋甲戌抄閱再評、仍用石頭記」の一文は、甲戌の年に脂硯齋が『紅樓夢』を読み、書き写し、再び評論を加え、『石頭記』を書名として用いることにしたという経緯——曹雪芹による原稿執筆および修訂後に、脂硯齋が「抄閱」して評論を加えるという、作者と評者が共同で作業を進める創作スタイルであったことを明ら

かにしている。それは前例のない斬新なものであった。さらに、「再」と「仍」の二文字は、甲戌本以前、あるいは曹雪芹が『紅樓夢』を執筆し始めたころ、脂硯齋はすでに創作活動に参与していたこと、そして『石頭記』を書名とする決定に脂硯齋も直接関わっていたことを物語っている。

このようにいえば、作品の題名が『紅樓夢』であるか『石頭記』であるかという議論になりがちだが、それはさほど重要ではない。注目すべきは、甲戌本のすべての巻首に「脂硯齋重評石頭記」と題されていることである。「石頭記」の上に記された「脂硯齋重評」の五文字は、曹雪芹が当初から脂評と小説は一体であると考えた末に題した書名である。すなわち、この作品は出来上がった草稿をそのつど脂硯齋に閲読・評論してもらい、曹雪芹はそれを承けてさらに推敲していたこと、そのため、書名は「紅樓夢」でも「石頭記」でもなく、あくまで「脂硯齋重評石頭記」でなければならぬという曹雪芹の真意を読み取るべきであろう。

ところで、脂硯齋の脂評のような評論は、『紅樓夢』に先立つ『水滸伝』や『三国志演義』にもみられる。金聖嘆による『水滸伝』の批評も、毛宗崗による『三国志演義』の批評も、一見脂評と同じように見えるが、実は

全く異質である。金聖嘆と毛宗崗の評論は作者の死後に書かれたものであって、あくまで一読者の立場から加えられた評論にとどまる。すべて個人的なコメントであり、作者とは全く無関係に生まれたものである。それに対して、脂評は創作と深く関わっており、彼らの評論とは根本的に違う<sup>(注12)</sup>。

ところが、伊藤漱平は「脂硯によるほしほしな本文加筆はなされることなく、彼は金聖嘆ばりの評を施すことで満足し、評者としての分際をかなり忠実に守ったであろうと想像される。(尤もその評も、個人的感傷に溺れた嫌いがあり、批評としては成功しなかつたが。)」<sup>(注13)</sup>と、脂硯齋は小説本文に手を加えることもせず、金聖嘆のような個人的なコメントを加えることで満足し、評者としての立場を守っていただけであるという。さらに、脂評は「個人的感傷」に浸っただけであるという。評論としてさえ成功していないと、まるで脂評そのものの価値を否定しているかのようである。

そもそも、施耐庵は金聖嘆と相談して書名を『水滸伝』としたのではないし、羅貫中もまた毛宗崗と共に作品名を『三国志演義』と決めたわけではない。ましてや彼らの評論と作品とは無関係である。周汝昌もいうように、「脂硯齋は『紅樓夢』の作者と同時代人であつたば

かりか、作者とも昵懇の間柄にあつた縁者であり、のみならず、脂硯齋は『紅樓夢』の創作過程をくまなく熟知していたうえ、みずから作者の執筆活動に直接かかわつた協力者でもあつた」<sup>(注14)</sup>のだから、脂硯齋は金聖嘆や毛宗崗とは全く違う。

脂評は曹雪芹にとつて『紅樓夢』の一部である。曹雪芹自身が真に言おうとしていたこと、それとなく暗示していることなど、読者にヒントを与えるものである。要するに、脂評抜きには作品を深く理解することができないばかりか、作者の真意も作品の背景も正しく読み解くことはできない。

甲戌本はわずか十六回分しか残存していないが、豊富な脂評が附せられている。その原文と脂評は最も曹雪芹の原稿に近いものであるから、作者の考え、真意、そして創作過程を反映していると理解してよい。

## 二、庚辰本にみえる脂評四条

胡適が甲戌本『脂硯齋重評石頭記』を入手した五年後(一九三二年)、新紅学の代表的人物のひとつである俞平伯の親戚・徐星曙は、北京の隆福寺で甲戌本と同題の『脂硯齋重評石頭記』の抄本を発見し、すぐさま購入し

て胡適に知らせた。

八冊、それぞれ十回から成るこの版本は、第五冊以降の表紙に「庚辰秋定本」の一文があったことから「庚辰本」と呼ばれる。各冊の表紙には「脂硯齋凡四回評過（脂硯齋凡そ四回閲読評価したもの）」の一文があり、第二冊の第十七回のはじめに「此回宜分二回方妥（此の回は二回に分ければよい）」の批語が、また、第七冊の目次には「内缺六十四回、六十七回（第六十四回と第六十七回は欠）」の一文があった。

この庚辰本もまた『脂硯齋重評石頭記』の転写本の一つで、この時点では甲戌本に次いで二番目に古い写本である<sup>注15</sup>。そして、胡適や周汝昌の考証・研究によって以下のことが明らかにされた<sup>注16</sup>。

- 一 脂硯齋は庚辰（一七六〇年）までに少なくとも四回は閲評していた。
- 二 庚辰本の脂評の一部には署名と年代が記されている。
- 三 署名は脂硯（脂硯齋）・梅溪・松齋・畸笏（畸叟・畸笏老人）の四名である。
- 四 梅溪と松齋の批語は各一条、いずれも甲戌本にある場所も内容も同じである<sup>注17</sup>。
- 五 甲戌本には一条しかなかった畸笏の批語が、庚

辰本には畸笏によると考えられるものが六十〜七十条ある。

六 甲戌本だけにみられる脂批は全九百一条、庚辰本だけにみられる脂批は全三百四十九条。甲戌本、庚辰本共有の脂批は全五百七十三条である。

確かに、わずか十六回分の甲戌本に九百一条もの脂批があることを思えば、七十八回分の庚辰本の脂批は、その数だけでみれば甲戌本よりはるかに少ない。しかし、庚辰本は幸いにして七十八回あるので、当然のことながら、その脂批の総数はこれまで発見されたすべての抄本の中で最も多い。換言すれば、庚辰本には他の抄本にはない、庚辰本だけにみえる貴重な脂批があるということである。たとえば、第十二回には次のような脂硯齋の脂批がある。

この本は細やかな心配りをして読むなら許されるが、そうでなければ、この本が泣く。

この本の文章、一つひとつの言葉の裏に作者の真意は隠されている。

とくと心せよ。この本を言葉通りに読まないこと、これこそが正しい読み方だ。

凡看书人从此细心体贴，方许你看，否则，此书哭矣。



此書表里皆有喻也。

觀者記之！不要看這書正面，方是會看（注）。

脂硯齋は『紅樓夢』の正しい読み方のヒントを讀者に伝えようと必死である。脂硯齋はいう、「この小説を理解するには表の文字通りの意味だけを取るのではなく、裏に隠されている作者の真意、物語の實在像を読み取らなければならぬ」と。すなわち、曹雪芹が本当に伝えようとしたのは何か、彼が実際に経験したこと、あるいは見聞したことについて、何をどのように描いているか、「正面」からみえるものと裏から読み取れるものとは違うので、言葉の裏に隠された意味を見逃すことなく、そして、曹雪芹が意図的に隠した真意を細心の注意を払って読み込むことが大切だということである。

「本が泣く」とは、作品の真意を読み取ってもらえないなら曹雪芹が泣くとの意であるが、脂硯齋が少なからず感情的な表現をしているのは、『紅樓夢』がひとたび世に出れば必ず誤解を招き、その結果、さまざまな非難をこうむるであろうことを予測していたからである。

当時、貴族たちは大家族の経済を支えるべき男性が怠惰な生活を送り、先祖から残された財産を食いつぶし、収入が消費に追いつかない没落寸前であった。そのような貴族の生々しい実態を描くことは、儒教社会、ひいて

は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の叛逆者として攻撃の対象となりかねない。この現実を自覚していた曹雪芹は、忌々しい現実が見えるような見えなような描写によって、自らも抱える儒教的束縛から逸脱する世界観を、登場人物を借りて述べることに、まさに「表里皆有喻」の小説に仕上げることにした。讀者が歪めて理解することを危ぶんだ脂硯齋は、『紅樓夢』をもよく知る者として、あえて裏の意味を読み解くことこそ大切であると訴えた。曹雪芹の心中を察した脂硯齋のこの脂評は、図らずも大胆にも『紅樓夢』の本質を物語ることとなっている。

また、庚辰本の第四十二回の前ページには、同じく脂硯齋の手になると考えられる脂評がある。

第三十八回の時点で、小説はすでに全体の三分の一を超えている。

今書至三十八回時已过三分之一而有余。

作品の創作に直接関わっていた脂硯齋が三十八回ですでに全体の三分の一以上に相当するといっているのであるから、『紅樓夢』は元々百二十回ではなく、百回前後であったと考えてよい。同時に、この脂評が書かれた時点で、作品の構想や章立て、内容まである程度は固まっ



いたことも明らかである。従って、『紅樓夢』は原作者曹霑が未完のまま世を去ったため、定稿としてはほぼ八十回をもって杜絶した<sup>(注19)</sup>というような、『紅樓夢』を未完小説だとする伊藤の説は妥当ではない。正確にいえば、『紅樓夢』はある程度の草稿が出来上がって脂硯齋が目を通していたところ、なんらかの原因で散逸してしまった、いわば不完全な小説と言うべきであろう。もちろん、乾隆期より通行していた百二十回の程高本が、曹雪芹のオリジナルに近いと考えられる庚辰本とは全く別ものであることは言うまでもない。

さらに、第五十二回の本文「やがて時計が四つ打つのが聞こえたころ(只听自鸣钟已敲了四下)」<sup>(注20)</sup>の下には、曹雪芹の祖父曹寅のことを示す以下のような脂評がある。

案ずるに、「四下」とは寅の刻(午前四時)のことである。本文に「寅」の字を省略したのは諱を避けるためであった。

按四下乃寅正初刻。寅此样法，避讳也。

ここにいう諱「寅」とは、曹雪芹の祖父曹寅(一六五八〜一七二一)のことをいう。曹寅の母孫氏は康熙帝が幼少のころ保母として仕えて、父曹璽(一六一九〜一六八四)は康熙二年(一六六三)に江寧織造に任ぜられ、

家を南京に移した。代々清朝に仕えてきた曹家であったが、曹璽と孫氏が康熙帝の信を得たことにより、曹家は曹璽の死後、長男の曹寅がその職を継ぐこととなった。康熙帝の命を受けた曹寅は、『全唐詩』ならびに『佩文韻府』を刊刻に大いに寄与し、また、自らの詩詞を『棟亭詩詞鈔』として刊刻したように、積極的に文化事業に取り組んだ。曹寅の死後、康熙帝は曹寅の子曹頤(一六八九〜一七一五)に江寧織造を継がせたが、その曹頤も三年後に病死した。曹寅の跡を継ぐ者がいないこと<sup>(注21)</sup>を気づかった康熙帝は、曹寅の弟にあたる曹荃(一六六二〜一七〇五)の第四子曹頰(一七〇二〜一七七五)を曹寅の養子とし、その職を継がせた。曹雪芹はその曹頰の子とも曹頰の子ともいわれるが、いまもって定説はない。しかし、曹頤の子であれ曹頰の子であれ、曹寅が曹雪芹の祖父であることは間違いない<sup>(注22)</sup>。

先に引いた脂評がいうように、曹寅の諱を避けていることもまた、曹雪芹の祖父が曹寅であることを意味している。曹寅と曹雪芹の関係が明らかとなったことによって、曹雪芹の家庭背景、教育背景などを管見することが可能になる<sup>(注23)</sup>。とりわけ祖父曹寅の生涯を知ることが、曹雪芹が曹寅からいかなる影響を受けていたのか、そしてそれが『紅樓夢』の創作にどのように反映しているの

かを究明する手がかりとなる。

ところで、庚辰本には脂硯齋の批語のみならず、畸笏叟と署名される脂評が少なくない。評者のひとり畸笏叟は、曹雪芹と脂硯齋の死後に『紅樓夢』の原稿を整理し、脂硯齋の批語を大量に削除した人物であるともいわれ、また、脂硯齋に次ぐ第二の評者と目されているが、その正体は未だに不明である。かつて脂硯齋と畸笏叟との脂評の文体や口調が酷似していることを理由に両者は同一人物だと判断した周汝昌<sup>注24</sup>も、一九五九年に発見された靖本<sup>注25</sup>にみえる畸笏叟の批語を根拠にその前言を翻した<sup>注26</sup>。筆者も畸笏叟は脂硯齋とは別人だと考えている。すなわち、畸笏叟は曹雪芹の近親者で、曹雪芹や曹家のことを熟知する者、世代からいうと、曹雪芹の父や叔父の代にあたる人物で、脂硯齋と同様に曹雪芹の親族のひとりであろう<sup>注27</sup>。

さて、その畸笏叟が丁亥（一七六七年）夏に記した脂評が庚辰本第二十回にみえる。

私はただ清書していた時に「獄神廟慰宝玉」などの五、六回分の原稿を見ただけで、その後、借覽者によって失われた。極めて残念だ！ 丁亥夏、畸笏叟

余只見有一次眷清時与獄神廟慰宝玉等五六稿、被借閱者迷失。叹収。丁亥夏畸笏叟

畸笏叟は、誰かが「獄神廟慰宝玉」などの「五六稿」、すなわち五、六回分の原稿を借り出したまま返却しなかつたために逸したというのであるが、この「獄神廟慰宝玉」は八十回にはないテーマである。したがって、この五、六回分の原稿は八十一回以降のものである。この脂評から以下の二点を読み取ることができる。

一 『紅樓夢』の八十一回以降の内容は丁亥（一七六七年）夏にはすでに構想ができており、少なくともその一部は出来上がっていた可能性がある。これは先述した四十二回の脂評の内容と一致している。

二 畸笏叟は曹雪芹と脂硯齋とをよく知る人物であり、『紅樓夢』の内容まで細かく洞察し、創作にも関わっていた人物である。

さらに、程高本の八十一回以降には「獄神廟慰宝玉」にあたる内容は全くない事実から、この脂評は程高本が曹雪芹のものでないこと、また、誰かが曹雪芹の構想に沿って書き続けたものでもないことも教えてくれることとなった。

### 三、甲戌本と庚辰本の脂評から管見できる『莊子』

これまで脂評本のうち甲戌本と庚辰本について言及したのは、『紅樓夢』のテキストの真偽を区別するためでもなければ、脂硯齋や畸笏叟の正体を探るためでもない。それは脂評が『紅樓夢』の世界を正確に理解するために必要不可欠な資料であることを明らかにするためである。なぜなら、『紅樓夢』の創作スタイル——曹雪芹が草稿を作成し、修正・改定するたびに脂硯齋が閲評するという、創作と評論・解説が同時に行われる独特の創作形式から生まれたものだからである。換言すれば、小説の内容は脂評と寄り添いながらできあがったもので、脂評がいかに作者に近い存在であったかがわかる。そこで、甲戌本と庚辰本にみえる脂評をもとに、『紅樓夢』の『莊子』の世界を管見するために、甲戌本第一回冒頭とその脂評をみてみたい。

みなさん、この小説は何からはじまると思いますか？——話は荒唐無稽に近いようですが、【脂評：自らこの小説の立意をいい、小説は元から荒唐なものだと告げた】よく味わうと味がありますよ。さあかの女媧という神が石を錬成して天の破れを補つ

たとき、大荒山【脂評：荒唐の意を寓す】は無稽崖【脂評：無稽の意を寓す】というところで、高さ十二丈、幅二十四丈の大きな自然石三万六千五百一個を精製したが、そのうち三万六千五百個だけ使つて、余つた一個を青埂峰の下に棄てた<sup>注28</sup>。

列位看官：你道此书从何而来？说起根由虽近荒唐，下将此来历注明，方使阅者了然不惑。原来女娲氏炼石补天之时，于大荒山【脂評：荒唐也。】无稽崖【脂評：无稽也。】练成高经十二丈，方经二十四丈，顽石三万六千五百零一块。娲皇氏只用了三万六千五百块，只单单的剩了一块未用，便弃在此山青埂峰下。

曹雪芹は冒頭から「说起根由虽近荒唐」と、自分の作品は荒唐な話だと言いつち、「荒唐」の意を託す一つの神話的な物語を設定した。それは女媧という女神が破れた天を補填する時に「大荒山」の「無稽崖」という場所で石を錬成したという話である。言うまでもなく、「大荒山」と「無稽崖」は「荒唐無稽」という語から作られた非現実的な地名である。そして、「荒唐無稽」で真っ先に想起されるのが『莊子』天下篇の「莊周、其の風を聞きてこれを悦び、謬悠の説・荒唐の言・端崖なきの辞

を以て、……卮言を以て曼衍を為し、重言を以て真を為し、寓言を以て広を為す<sup>〔注29〕</sup>である。天下篇は『莊子』の最終篇で、いわば莊子の哲学の総論である。『莊子』はとりとめない言説（謬悠之説）やオーバーな言い回し（荒唐之言）、はたまた非常識な話（无端崖之辭）を巧みに操って、一面的な物の見方を揶揄し、「卮言」「重言」「寓言」によって自由な精神と真実への探求心、広い世界に目を向けることの重要性を語っている。すなわち、曹雪芹は冒頭から「大荒山」と「無稽崖」を設定し、随所に「卮言」「重言」「寓言」の手法を駆使して、現実社会の欺瞞を暴き、人間社会の真実を語ろうとしている<sup>〔注30〕</sup>。

もちろん、『紅樓夢』の立意が『莊子』にあることは、脂評を待つまでもない。にもかかわらず、脂硯齋は原文のすぐ下に説明を加えて強調しようとした。曹雪芹が「说起根由虽近荒唐」というと、脂硯齋はすぐさま「自站地步自首荒唐」、つまり「作者自らこの小説の立意をいい、小説は元から荒唐なものだと告げた」と読者にアピールしたのである。また、曹雪芹が「大荒山」と「無稽崖」を言い出すと、脂硯齋が待っていましたとばかりに、「大荒山」には「荒唐」の意が、「無稽崖」には「無稽」の意が託されていると評して、もし後世の読者が

「大荒山」と「無稽崖」から「荒唐無稽」の意を読み取ることができなくても、脂評は作者の真意を正確に理解するための一助としたのである。

次に、同じ甲戌本第一回到このような脂評がある。

これまでの古い小説のしきたりを真に打破する。それがこの小説の最初からの本意である。その筆致は『莊子』、『離騷』を次ぐものである。

開卷一篇立意，真打破历来小说窠臼。阅其笔，则是《庄子》、《离骚》之亚<sup>〔注31〕</sup>。

実は、曹雪芹は第一回において、古い才子と佳人の恋愛小説のしきたりを「堅苦しい理屈の通らぬ美文調（開口即者也之乎，非文即理）」<sup>〔注32〕</sup>と諷刺し、『紅樓夢』がそれ以前の小説とは全く異質のものであると明言している。曹雪芹はこれまでの小説の仕組みを批判し、中国古典文学作品の陳腐な書き方を「千篇一律、似たり寄つたり（千部共出一套）」、「人情からかけ離れて矛盾だらけ（悉皆自相矛盾，大不近情理之话）」<sup>〔注33〕</sup>と揶揄する。それだけでなく、『紅樓夢』は人と人との出会いと別れ、喜びと悲しみ、栄枯盛衰などをありのままに描いており、道徳的な説教臭が一切なく、人間の真実を見失わない小説である。そこに、脂硯齋は、『紅樓夢』が「これまでの古い小説のしきたりを真に打破する」といい、そ

の優れた文学性・思想性を高く評価し、大胆にも『紅樓夢』は『莊子』や『離騷』<sup>〔註34〕</sup>に匹敵する作品だと断言した。脂硯齋が『紅樓夢』の筆致・構成・立意は『莊子』に並ぶものともいうように、脂評はいち早く『紅樓夢』に『莊子』の世界を見いだした評論である。

ところで、八十回までの多くの脂評が、『紅樓夢』が『莊子』の世界を反映していることを裏付けているのは言うまでもないが、散逸した八十一回以降の脂評にも、同じように『莊子』の思想が一貫していることを示唆する脂評がある。たとえば、庚辰本第二十五回にみえる「丁亥夏 畸笏叟」の署名入りの脂評がそれである<sup>〔註35〕</sup>。

「懸崖撒手」の具体的な内容を見ることができず、はなはだ遺憾である！丁亥夏、畸笏叟。

叹不能得見宝玉「懸崖撒手」文字为恨！丁亥夏，畸笏叟。

この脂評は当時すでに散逸してしまった文章に言及したもので、「懸崖撒手」の内容は八十回にはないので、八十一回以降の原稿の内容であることは明らかである。その内容の詳細は今もなお知ることはできないが、少なくとも「懸崖撒手」の四文字は曹雪芹の原稿からの引用だと考えてよい。

「懸崖」とは崖っぷちのことで、それは同時に行き止

まりを意味する。断崖絶壁にたどり着くと進むべき道がなくなることを暗示する。この「懸崖」こそ、『紅樓夢』第一回で語られる宝玉の前世——まだ石ころであった宝玉がいた場所「大荒山」の「無稽崖」を指している。また「撒手」とは手を離す意で、ここでは人生を捨てる、家族を見捨てる、理不尽な人間社会から押し付けられたすべての喜怒哀楽を放擲することをいい、さらには出家や自ら命を絶つという意味で理解することもできる。要するに、宝玉は残酷な現実も自らの行く末も見抜き、家庭や社会から加えられた苦しみを投げ出して、「無稽崖」にたどり着くのである。すなわち、宝玉にとつて「懸崖」は人生の始まった出発点であると同時に、何もかもを終わらせる終着点でもある。

宝玉のこの死生観は、まるで「万物は一府、死生は同状たり（萬物一府、死生同状）」（『莊子』天地篇）の莊子の哲学思想を再現しているようである。世の中のすべてのものは一つの器の中にあるのだから、生も死も同じことだと莊子という。宝玉はこれまで関わったすべての人や物、経験した喜びも悲しみもすべて「萬物一府」と認識し、自らの人生の終わり方として、自分の生まれ た場所「無稽崖」に戻って人生を終ろうとする。それは「死生同状」、生と死とはつまるところ同じことだとする

莊子の死生観に共鳴している。それがこの「懸崖撒手（宝玉は崖つぶちで何もかも手離した）」の内容である。う。

このように、宝玉の結末に関わる「懸崖撒手」は八十一回以降の核心のひとつ、ひいては全編にとって主人公の人生観を反映する最も重要なモチーフで、すでに曹雪芹によって書かれていたことは間違いない。すなわち、「懸崖撒手」というわずか四文字を記しただけのこの脂評が、主人公の結末を知らしめるだけでなく、八十一回以降の内容もまた莊子の人生観を貫いたものであることを告げているのである。

以上、甲戌本と庚辰本から三条の脂評を取り上げ、それぞれ違う角度から『紅樓夢』と『莊子』の世界の関連性について管見した。『紅樓夢』冒頭とその脂評は、『莊子』の荒唐無稽な世界を語ることによって『紅樓夢』の立意が『莊子』であること、内容もまた『莊子』の世界を色濃く反映していることを告げている。また、大胆にも「紅樓夢」は『莊子』に匹敵する」と評価する脂評は、『紅樓夢』の筆致・構成・文学的表現までも『莊子』に酷似していることを示唆している。さらには、散逸した内容に言及している脂評からは、『紅樓夢』は曹雪芹自らが意図していた立意を八十一回以降も堅持してお

り、最後まで莊子の思想を貫いていたことを立証するものである。

#### 四、脂評の位置づけ

ところで、周汝昌『紅樓夢新証』に代表されるように、中国では脂評を『紅樓夢』研究にとって貴重な資料と認識し、作品の内容を検証するために積極的に活用している。一方、日本ではこれまで脂評をもっぱら版本や曹家の系譜を考証する資料として用いるだけで、『紅樓夢』の根底に横たわる思想の解明に供することはほとんどなかった。脂評は『紅樓夢』に描かれた莊子の世界を読み解く貴重な資料と考える筆者には、このことは非常に不可解である。

確かに、脂評本に関する先行研究は、日本においても伊藤漱平をはじめとして少なくない。現に氏は『紅樓夢』が未完の小説であるとした上で、「作者の原稿本にもっとも近い姿を示すと考えられる版本は、……「脂硯齋評本」を措いて他にない」<sup>注36</sup>と、脂評本の重要性を明言している。

かつて中国で八十回本（脂評本系統）ではなく百二十回本（程高本系統）がもてはやされたのは事実である。



それについては、氏がいうように、脂本が八十回の「未完」であったのに対し程甲本には四十回の続作があったために「完結した作品」とみなして広く読まれていたこと、また、何よりも活字本である程甲本の読みやすさが主な理由であろう<sup>(注37)</sup>。しかし、その事実は決して『紅樓夢』の真実ではない。

さらに、氏は「『原紅樓夢』を問題にして論じようという場合、あるいは小説家としての曹霑を取り上げて論じようという際、……ともかくも現存の脂本をその手がかりとする他ない」<sup>(注38)</sup>と、『紅樓夢』研究において脂評を緻密に読み解くことの重要性を指摘している。にもかかわらず、なぜ脂評を駆使して作品の思想性に言及する研究成果が生まれなかったのだろうか<sup>(注39)</sup>。

その理由の一つは脂評が難解であったから、そして、それ故か日本語訳が生まれなかったからでもあるが、最大の原因は、氏のいうところの「金聖嘆ばりの批注が必ずしも批評として成功して」いないとする脂評の位置づけ<sup>(注40)</sup>が定着し、その資料的価値を正しく評価してこなかったことではなからうか。

もちろん、中国においても、「脂硯齋という人物ばかりか、脂硯齋が『紅樓夢』にほどこした評語の価値までも、なるだけ低く評価しようとする意見もある」し、

脂評は「金聖嘆による『水滸伝』評注の亜流にすぎず、しかも昔時の《評点派》の手になる文章というものは筆の戯れの駄文がほとんどであって、とりたてて評価するほどの価値はない」とする否定的な見解があることも事実である<sup>(注41)</sup>。しかし、周汝昌はその間違いについて次のように注記している。

一部の研究者は、現代のさまざまな理論・見解・観点から脂硯齋を評価判断し、現代的な基準に合致していない場合には、脂硯齋は『紅樓夢』を理解していないとか誤認しているとか、たちまちに結論を下してしまふ。それもまた脂硯齋研究の一方法には違いなからう。しかしながら、研究というものは事実から出発すべきものであって、だんじて抽象的概念から出発すべきでない、というのがわたしの考えである<sup>(注42)</sup>。

すでに「甲戌本にみえる脂評二条」で述べたように、そもそも『脂硯齋重評石頭記』と『金聖嘆批評本水滸伝』とはまったく違う性質のものであり、脂硯齋と金聖嘆とを同列に論ずることはできないのである。脂硯齋は曹雪芹に寄り添うかたちで創作に深く関わり、間接的にも直接的にも作品に影響を強く与えた人物である。それに対して、金聖嘆の『批評本水滸伝』は、『水滸伝』の



成書に関わっていないどころか、作者施耐庵との繋がりもまったくなく、あくまで彼自身の趣味的な執筆活動の産物であった。それを脂評本の批語は「金聖嘆ばりの批注」だと決めつけて切り捨てることには、筆者はとうてい賛同できない。まさに、周がいうように、「金聖嘆は一種封建的な立場観点から『水滸伝』に評注ないし改竄をくわえたが、脂硯齋とはいえば、作者の立場観点と完全に同一といえないまでも、金聖嘆とは比較にならないほど作者と心情をひとしくし、作者の意図と主張とを貫きとおした人」<sup>(注45)</sup>であるのだから、脂評と金聖嘆の批評とを同じように扱うのは正しくない。

しかし、伊藤は八十一回以降の『紅樓夢』について、「曹霑はことさらに八十回以後の部分破棄し、伝える意志を喪つたとも考えられる。(かつて聖嘆が『水滸』の第七十一回以後を刪つたごとくにてある)。……彼が己れの分身である宝玉に出家得道させ」たといい、また「宝玉出家の趣向などは『金瓶梅』巻末の孝哥出家の意匠を借りただけかも知れぬ」ともいって、曹雪芹が自らの意思で八十一回以降の作品を破棄したというのであるが、それはまさに氏自らいうところの「文学的想像」に過ぎないと考える<sup>(注46)</sup>。

この点に関して、周は次のようにいう。

たとえば金聖嘆のような人物は、早い話、『水滸伝』が多くの人々によってながらく読みつかれてから現われた後世の一読者にすぎず、小説の作者とか作者の人柄とか創作過程とか、そうした観点から見ると、金聖嘆じしん全く「無関係」の第三者だったわけで、したがって彼の『水滸伝』評本というものも、そうした第三者の手になる一連の作品群から一步も出るものではない<sup>(注47)</sup>。

金聖嘆は『水滸伝』の作者でもないし、作者を知る者でも創作に関わった者でもない。金聖嘆が『水滸伝』を削除したり評論したりしたことは、金聖嘆ひとりの意思によるものであって、作者とは無縁のことである。金聖嘆評『水滸伝』と『水滸伝』そのものとは全く無関係なのである。したがって、脂硯齋と金聖嘆、『紅樓夢』と『水滸伝』とを単純に比較することじたいが筋違いである。それを伊藤は繰り返し『紅樓夢』と金聖嘆評『水滸伝』を比較し、脂評は「金聖嘆ばりの批注」で、「この小説に箔をつけかたがた沽れやすくしてやろうとの評者のせつかくの配慮があだとなり、却って敬遠される原因」<sup>(注48)</sup>となったという安易な結論を導き出しているが、それは作者曹雪芹と評者脂硯齋との関係や『紅樓夢』の創作過程を軽んじた結果ではないだろうか。

さらに、「甲戌本と庚辰本の脂評から管見できる『莊子』」でみたように、脂評「懸崖撒手」は『紅樓夢』八十一回以降にとって大きなテーマであり、主人公宝玉の人生観を全面的に反映する一つの場面で、それが『莊子』の世界観と重なることも容易に理解することができ。にもかかわらず、曹雪芹にとって最も重要な宝玉の結末「懸崖撒手」についても、伊藤氏は「出家得道」という一般的な解釈に終始し、その「出家の趣向」もまた『金瓶梅』の「意匠を借りただけ」と切り捨てたのは、氏が脂評「懸崖撒手」の内容を重視しなかつたからであろう。

言うまでもなく、伊藤が版本学から曹家の歴史まで幅広い『紅樓夢』研究に大きな貢献をしたことは海外でも高い評価を得ている<sup>(注47)</sup>。また、現に氏は日本語訳をするに当たって、「この訳書は、兪平伯校訂『紅樓夢八十回校本』（人民文学出版社、一九五八年）およびその付録の後四十回を底本とし、各種の脂硯齋本や程偉元本など諸本を参照して訳出したものである」<sup>(注48)</sup>と述べている。これは兪平伯校訂『紅樓夢八十回校本』の凡例<sup>(注49)</sup>に基づく見解であるから、氏が脂評本をテキスト研究として重要な価値があると認めていることも間違いない。もとより筆者はそのことに反論するつもりはない。ま

た、本稿はそれに異論を申し立てるものでもない。ただ、『紅樓夢』研究の大きな問題は、版本論争に陥りやすいことで、最も重視すべき小説本体の理解、あるいは曹雪芹の思想を解明することが後回しにされることである。これまでの『紅樓夢』研究では、種々の脂評本や脂評を、脂硯齋とは誰かを考証するための資料、あるいは版本研究のための資料として扱うことに終始し、脂評によって『紅樓夢』の思想研究にアプローチすることはほとんどなかった。その原因は、おそらく脂評と他の作品の評論——『水滸伝』や『金瓶梅』の評論との比較によって生じた脂評の位置づけの不適切性、換言すれば脂評本体の価値を低く評価したために真の意義を十分認識できなかったからであろう。しかし、『紅樓夢』の思想研究及び曹雪芹の哲学世界に言及しようとすれば、脂評を抜きに語るなどできないということである。

### おわりに

周汝昌著『曹雪芹小伝』の訳者小山澄夫は、『紅樓夢』は「旧時代的「因果律」の桎梏を脱し、いわば近代的不合理」へと一步を踏み出していると言えよう<sup>(注50)</sup>と、『紅樓夢』の創作方法は「旧因果律的文学構図」とは全

く異なつて、読者に「追体験」と「解釈」を求める「不合理」な作品であると明言している。筆者もまた、『紅樓夢』は『牡丹亭』、『長生殿』、『水滸伝』、『金瓶梅』等々の通俗小説と同じように扱うべきではないと考える。そして、氏はさらに次のようにいう。

作者が全知全能の語り手として一方的に「与え」、読者は無力な聞き手として受動的に「与えられる」という旧来の文学構図の崩壊とともに、読者と作者との緊張関係のもとに作品の《個性》決定される、読者による積極的な学営為の可能性の成立が認められるからである(注5)。

一見すれば『紅樓夢』はごく普通の古典白話小説に見えるが、読者は受け身一方で物語の内容を理解するのではなく、作者との間に一つのコミュニケーションを取りながら、積極的に作品の意味と作者の意図を自由に理解することができる小説である。「読者による積極的な学営為」を働かせる筆者にとつて、『莊子』の世界を彷彿とさせる『紅樓夢』が具体的に小説の中でどのように表現されているのか、『紅樓夢』にみえる「卮言」「重言」「寓言」に曹雪芹はいかなる意味を託そうとしたのか、それらを正しく読み取るために脂評は極めて重要な資料となるのである。脂評は『紅樓夢』の創作過程から

諸場面の描写に込められた作者の真意にいたるまで、あらゆることがらに言及しており、さらには『紅樓夢』の根底に横たわっている『莊子』の世界を解明する手がかりを与えてくれるからである。

小山もいのように、『紅樓夢』における登場人物のあらゆる「心理」や「行為」が、すべて明々白々に説明し尽くされているわけではない。そこに、『紅樓夢』の原稿に注釈をほどこした脂硯齋の評する、いわゆる〈不写の写〉(描写なき描写)なる側面がある(注6)のだから、脂評は読者による作品の理解に大いに役に立つものであることは明らかである。換言すれば、『紅樓夢』研究は脂評とともにあるということ、脂評を小説の一部として正確に考察しない限り『紅樓夢』の真の姿は解明できないということである。

## 注

(1) 『国際文化論集』第四十七号(桃山学院大学総合研究所刊、二〇一三年三月)

(2) 梁归智《石头记探佚》所收周汝昌〈序〉(山西人民出版社、一九八三年)を参照。

(3) “通过脂批去揭示此书独特表现手法和潜在的思想艺术内

涵、我以为是脂评本的重中之重。”（邓遂夫校订《脂砚斋重评石头记》甲戌校本、作家出版社、二〇〇〇年）一四頁

(4) 甲戌本と庚辰本は、他の写本に比べて大量の脂評が残されたため、最も貴重な版本とみなされている。

(5) 旧紅学・新紅学については、前掲拙稿を参照。

(6) “民国十六年夏天，我在上海买得大兴刘铨福旧藏的《脂砚斋重评石头记》残本十六回”（《脂砚斋重评石头记》甲戌校本附录三所取胡适〈影印《乾隆甲戌脂砚斋重评石头记》的缘故〉三五頁）

(7) 前掲邓遂夫校订《脂砚斋重评石头记》甲戌校本 附录三 三五頁

(8) 程偉元（一七四二？～一八一八？）と高鶚（？～一八一五？）とによって整理された版本。乾隆末年、程偉元は寄寓していた北京で『紅樓夢』百二十回の写本を入手した。高鶚は程偉元に協力して『紅樓夢』の補訂作業を行い、乾隆五十六年（一七九一年）、萃文書屋より百二十回『紅樓夢』（程高本）を刊行した。

(9) 『紅樓夢』小説本名《石头记》，作者相传不一，究未知出自何人，惟书内记曹雪芹先生删改数过。”（一粟編《紅樓夢卷》所取程偉元《紅樓夢序》中华书局，一九六三年）三一頁

(10) 曹雪芹の卒年については、周汝昌は癸未（一七六四年）とする。周汝昌《紅樓夢新証》一七三頁（人民文学出版社、一

九七六年）

(11) 脂砚斎以外にも創作に関与した人物がいた可能性はないわけではない。この点に關しては、後述する。

(12) “脂砚斎の批紅樓夢，不用说，和清初金人瑞批水浒、毛宗冈批三国、张竹坡批金瓶梅、陈士斌等批西游记这一风气是有其直接关联的；不过，脂砚斎究竟与金、毛、张、陈一流人有所不同。金、毛等人，只是普通读者，就读者的眼界发表意见；而脂砚斎则不然，他和小说创作过程有极密切的关系，……脂砚斎与金人瑞等人不同，他是经过作者本人承认而且写入正文的批者。”（周汝昌《紅樓夢新証》八五三頁）

(13) 伊藤漱平「『紅樓夢』の成立」四五頁（伊藤漱平著作集Ⅰ 汲古書院、平成十七年）。なお、引用にあたってはすべて新漢字に改めた。

(14) 周汝昌『曹雪芹小伝』三七七頁（小山澄夫訳 汲古書院、二〇一〇年）

(15) 甲戌本（一七五四年）と庚辰本（一七六〇年）との間にあたる乾隆二十四年（一七五九年）の写本「己卯本」は、庚辰本発見後に見つかったものである。

(16) 胡適《跋乾隆庚辰本《脂砚斎重評石頭記》鈔本》（《胡適紅樓夢研究論述全編》上海古籍出版社、一九八八年）及び周汝昌《紅樓夢新証》を参照。

(17) 胡適は松斎の批語を二条と断じたが、周汝昌は一条と判断

した。周氏によれば、二条のうち一条は批語の後に松斎の署名があるので松斎のもの、もう一条「松斎云好笔力、此方文字佳处」は、松斎自ら言ったものではなく、別の誰かが松斎の言を引用したもの、あるいは代筆したものとするのが妥当であるという。(署名松斎的、也只有一条——胡适则以为有两条、但其中另一条云：松斋云好笔力，此方是文字佳处。此种口气可能是松斋第一身说话，但也可能是别人征引或代记。)(周汝昌《红楼梦新证》八三七頁)

(18) 邓遂夫校订《脂砚斋重评石头记 庚辰校本》(作家出版社、二〇〇六年) 二〇三頁

(19) 前掲『伊藤漱平著作集』I 五七頁

(20) 飯塚朗訳『紅樓夢』II 一六三頁(集英社、一九八〇年)。なお、本稿では『紅樓夢』の本文の日本語訳はこの飯塚訳を用いる。ただし、日本語訳のない脂評は筆者の訳による。

(21) “奴才年当弱冠，正犬马效力之秋，又蒙皇恩怜念先臣止生奴才一人”(故宫博物院明清档案部编《关于江宁织造曹家档案史料》一〇二頁 中华书局、一九七五年)の一文から、曹寅の跡を継ぐ者は一人息子の曹頌しかいなかったことがわかる。

(22) 以上は周汝昌《红楼梦新证》所収《人物考》及び《史事稽年》、周汝昌《曹雪芹小传》(华艺出版社、一九九八年)、冯其庸《曹雪芹家世新考》(文化艺术出版社、一九九七年)を参照。

(23) 曹寅没後に生まれた曹雪芹は、曹寅から教育を受けたこと

はなかったが、祖父の影響を受けて育ったことは間違いないと筆者は考える。

(24) 周汝昌《红楼梦新证》所収《脂砚斋批》八三三頁〜九四〇頁を参照。

(25) 靖本とは、揚州の靖应鵬家の蔵本である。一九五九年、靖应鵬の友人毛国瑤が靖邸で他本には見られない多くの批語や異文が含まれる手鈔本を発見した。毛国瑤はそれを借り出し、その中の批語を抄録した上で同年末に靖氏に返却した。一九六四年、毛国瑤は兪平伯と周汝昌にこの版本のことを伝え、再び靖家を訪問して靖本を借閱したい旨を申し込んだところ、原書は既に紛失していたという曰く付きの本で、今も行方不明のままである。刘梦溪《红楼梦与百年中国》三九三〜三九五頁(中央编译出版社、二〇〇五年)参照。

(26) “第二十二回有一条墨笔书云：前批(按指前面的一条朱批)知者(聊聊)寥寥，不数年，芹溪、脂砚、杏斋诸子，皆相继别去，今丁亥夏，只剩朽物一枚，宁不痛杀！此批当出‘畸笏’之手，亦见他本，但独无「不数年……」十六字。笔者过去认为畸笏亦即脂砚化名。今有此批出现，则拙说似误。此尚待细论。”とあるように、同一人物だとみられた脂砚斎と畸笏とは、実は別人であることがほぼ確実となった。すなわち、丁亥の夏(一七六七年)以前、芹溪(曹雪芹の別名)と脂砚とが相次いで世を去り、『紅樓夢』に深い関わりを持つ者の中で畸笏

ひとりが残されたのである。(周汝昌《红楼梦新证》所収〈附录编 靖本传闻录〉一〇五〇—一〇六六頁)

- (27) 脂硯齋が「余初看之，不觉怒焉，盖谓作者形容余幼年往事。因思彼亦自写其照，何独余哉？」(第十七回・十八回)と、曹雪芹と同年代だと示唆しているのに対して、畸笏叟は「畸笏老人」(第二十五回)を自称している。また、両者ともに批語の中でしばしば「余家(我が家)」という表現を用いており、それはとりもなおさず彼らが曹家の一員であることを物語っている。

(28) 前掲飯塚訳『紅樓夢』I 一二頁

(29) 『莊子』天下篇 金谷治訳注『莊子』第四冊(岩波書店、一九八三年)二二八頁

(30) 『紅樓夢』と『莊子・天下篇』の関係については別に詳論する。

(31) 前掲《脂硯齋重評石头记 甲戌校本》八三頁

(32) 前掲飯塚訳『紅樓夢』I 一三頁

(33) 同上

(34) 『紅樓夢』全編にしばしば登場する『離騷』や『九辯』も『紅樓夢』の研究の大きなテーマであるが、ここでは触れない。

(35) この一条の脂評は、甲戌本と庚辰本両方の版本にあるが、庚辰本には「丁亥夏 畸笏叟」の署名が付いているものの、甲戌本にはない。この脂評は脂硯齋によるものか、畸笏叟に

よるものか、あるいは丁亥夏に畸笏叟が書き写し、署名を加えたものか定論はない。いずれにせよ、この脂評は脂硯齋もしくは畸笏叟によって書かれたものである。

(36) 伊藤漱平「脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書」五七頁(『伊藤漱平著作集』I 所収)

(37) 同上五九頁

(38) 同上六〇頁

(39) これまでも脂評を使った研究がない訳ではない。しかし、それらは食文化や服飾、あるいは文学性や仙女崇拜などに關するもので、作品の思想性、すなわち『莊子』の世界に言及した研究成果は皆無に等しい。

(40) 前掲「脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書」五九頁

(41) 周汝昌「曹雪芹小伝」三七六頁(小山澄夫訳 汲古書院、二〇一〇年)

(42) 同上三八四頁の注五

(43) 同上三七八頁

(44) 伊藤漱平「曹霑と高鶚に関する試論」四三〇頁(『伊藤漱平著作集』I 所収)

(45) 前掲「曹雪芹小伝」三七六—三七八頁

(46) 前掲「脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書」五九頁

(47) 孙玉明《日本红学史稿》所収(伊藤漱平在该时段的《红楼梦》研究)(北京图书馆出版社、二〇〇六年)一七六—一九七頁を

参照。

- (48) 伊藤漱平訳『紅樓夢』(上) 五八八頁(平凡社、一九七三年)
- (49) 俞平伯校訂・王惜時參校《紅樓夢八十回校本》(人民文學出版社、一九五八年)の〈校改紅樓夢凡例〉に、「以戚本爲底本、以脂庚本爲主要校本、定爲新本、而與其他各抄本參校之、不得已則參考刻本」とある。
- (50) 小山澄夫「紅樓夢 情から不合理へ」三二五頁(伊藤漱平編『中国の古典文学―作品選読』所収。東京大学出版社、一九八一年)
- (51) 同上三二七頁
- (52) 同上三二五頁